

弔辞を捧げ、家人に乞われて火葬場に納骨を済ませて参りました。

全抑協の先駆者として常に指導者として御苦勞をされました。本当に色丹島で巡り合った十歳以上の先輩に多くの事を教わり、その事が私の人生にプラスに、その時その時に役立てたことにただ感謝あるのみです。

振り返って私の人生に五年間の軍隊生活、四年余に及ぶ屈辱の人生、これが私の宿命と思っております。

アツツ島、キスカ島、幌筈島の戦記は抑留生活とは関係ないので省略いたしました。

【執筆者の紹介】

堀勇二郎氏は、旧日本軍隊の中堅幹部として隊員を統率した軍歴を有しています。

北海道におけるシベリア抑留補償要求運動の先駆者、北川小樽支部長の信頼も厚い人柄です。

小樽における運動の論点について、筆者と紹介者が会話に花を咲かした事が印象的でした。

後日のためにその主なるものを挙げますと次の点です。

我々抑留被害者が補償を求めるためには、被害の事実を正直に正確に取りまとめ、かつ当時有効に存在する国際法としては一九二九年捕虜条約に基づいた主張をすべきところ、大半の被害者が帰国復員後締結された一九四九年捕虜条約を主たる請求理論としたために、裁判官の職務権限として敗訴の判決を出さざるを得ない事情があったのです。

筆者は健康上優れていませんが、シベリア関係運動には活動者のため紹介しました。

(北海道 安田 忠雄)

ソ連強制抑留よもやま話

北海道 佐々木 佳明

終戦間際に白城子飛行場警備大隊は白城子から奉天(瀋陽)に移動した。昭和二十(一九四五)年八月十

五日正午、大本營の重大放送があるということで、大隊は全員集合した。一同ラジオの前で玉音を聞いたのだが、ガーガーと雑音がひどく、しかも距離があったので内容が全く聞きとれなかった。しかし、前に位置して不動の姿勢で神妙に聞き入っていた隊長の様子から戦争に敗れたことは察知ができた。

玉音放送が終わると大隊長から、敗戦により連合軍に無条件降伏した旨告げられた。一瞬、ただただ愕然となり氣力が抜け茫然となった。

それから二十日あまりは放浪生活を送り、九月十三日、奉天郊外で武装解除となりソ連側の捕虜の身となった。

黒河省黒河に約一カ月収容された後、川向かいのブラゴエシチェンスクに渡り、準備された有蓋貨車にぎゅうぎゅう詰めに詰め込まれた。貨車は上段、下段に仕切られた、いわゆる二段ベッド式である。上段に四カ所小さな窓があった。

警備兵から「トッキー、ダモイ（帰国）」と聞かされた。シベリア送りの話など全くなく、ウラジオス

トック経由で帰国させられるのだと思い込んでいたのだが、なんとなく不安な気持ちがよくあった。

本場にウラジオストック経由で帰国なのであろうか、はたまたシベリア送りなのか、半信半疑のまま貨車は夕方、北に向け走り出した。シベリア鉄道に入り列車が東に向かえば帰国で、西に向かえばシベリア行きだ、気にしながら、いつしか眠りに入っていた。

何時頃だったのであろうか、誰かが「オーイ、太陽がケツから出てるぞ」と叫んだ。何ということだ、一斉に車内は騒然となった。太陽が後ろから出ているのは、列車は西に向かっているのだ。しばし方向確認で車内はてんやわんやであった。果たして我々は何処へやられるのか、帰国でないことは確定し、もう観念せざるを得なかった。

数日後の朝、列車はバイカル湖畔に差しかった。湖とは思えない大海原である。夕方、小さな窓から目に入ったのは河口に小舟を浮かべて糸を垂れている釣り人の姿であった。自分も釣りが好きで、故郷ではよく釣りに出かけたものだった。ありし日を思い浮かべ

ながら、久しぶりに見る釣り人の姿が懐かしく思った。

輸送中、貨車の中でしびん代わりに一升瓶を利用したが、瓶の口につけて放尿すると辺りに飛び散り甚だ迷惑である。ほどほどに離して用を足すのだが、列車が揺れているので、これがなかなか難しい。二十日余りの輸送期間中は虱との闘いでもあった。

列車は十一月十六日、ようやくソビエト連邦ウズベック共和国タシケントに到着した。

直ちにタシケント収容所に収容された。収容所は周囲が三重の有刺鉄線が張り巡らされ、有刺鉄線の間はトタン板で無造作にふさがれていた。四隅に監視櫓があり監視兵が見張っている。

収容所に入ってまず点呼である。彼等は数字に弱く、九九算は全くといっていいほど駄目である。約千三百人の点呼は容易なものでなかった。まず五列縦隊となり数え始めるが、なかなか数え切れない。次は十列に並べられ、行ったり来たりして何度も数える。いささかしびれを切らされた。

タシケントはヒマラヤ山脈の北方に位置し、この地方の大都市である。緯度は青森県の弘前市と同じくらいで、大変気候の良いところであった。

夏は摂氏四十度以上気温が上昇することがあるが、湿度が非常に低いので、日陰に入るとしのぎやすかった。この暑さでは素足で歩くことはできない。鉄物を運ぶ作業員は防寒服に防寒手袋でなければ鉄物は扱えない。冬はせいぜい零下五度程度であった。雪も割と少なく、しのぎ良く、恵まれていた。

小生は軍隊当時、経理室勤務を命ぜられ、糧秣担当で炊事に係わった経験から炊事要員となり、糧秣の受領及び管理の任務に充てられた。

炊事場にはステンレスの大釜が三基と中釜一基が設置されていた。雑炊などは木製の大へらでかき混ぜる。民謡を歌いながら調子を合わせゆったりと攪拌する。かような作業は民謡がよく合うのである。東北の民謡が多かった。軍歌はリズムに合わず余り歌わなかった。かまどの焚口は外で、燃料は粉炭で火力が余り上がらず、時折外の焚き人に対し火は燃えているか

と大声が上がる。

この地方は氣候が良く肥沃な土地で農産物が豊かな
コルホーズ（集団農場）地帯であり、農業用機械、農
業用器具製作の工場があった。

虜友の多くはこれら工場の作業に就労した。特に旋
盤工、鋳物工の技術者も多く、これら技術者は驚異的
なノルマを達成した。ソ連の技術者は能力があっても
一〇〇％以上は働かないのだという。虜友たちは能力
のあるだけ力を発揮させられたのだろう。そのため非
常に優遇され、それなりに報酬が多かった。炊事係は
給料がないので彼らの分け前を頂戴した。一方、土方
の作業に従事した仲間は悲惨であった。土方は主に囚
人が就労する仕事とかで、いくら精を出して働いても
全くノルマが上がらず、常にプロホーラボータ（働き
が悪い）で、報酬は皆無で支給される食糧も少なく悪
循環である。高ノルマを達成したハラシヨールボータ
（優良労働者）は黒パンの量も多く、白パンを支給さ
れることもあった。時には夕食時に賞賛され一段高い
テーブルで食事が与えられることもあった。

ラーゲリ（収容所）生活が始まり、ややしばらくし
て中央で教育を受けた政治部のアクチーブ（活動分
子）が中心となり民主主義運動が始動した。階級章も
なくなり、隊長は選挙となった。最初に選ばれた大隊
長は北海道由仁町の若い青年隊長日氏であった。我々
は仲間を同志と呼ばされた。

まずは将校のつるし上げから始まった。周囲は青年
部が陣取り、アクチーブが追及する。軍隊当時妻帯し
た将校は官舎が与えられ、車で送り迎えされるのであ
る。官舎には官舎当番がつく、いわゆるお手伝いさん
である。官舎当番であった同志から直接目にした官舎
での淫らな私生活等があげられる、いわゆる大衆裁判
である。

いよいよ思想教育、民主化運動が激しさを増し、朝
六時になるとアクチーブのアジ演説が始まり、機が飛
ぶ。夜になるとハバロフスクから抑留者向けに発行さ
れた日本新聞が配られ、アクチーブによる輪読会が始
まるのである。

この新聞の内容は、階級闘争を通じてマルクスレー

ニン主義云々とか、帝国主義の誹謗、ファシスト反動打倒せよ、民主主義を勉強しようというもののばかりで、ここには強制抑留者をねぎらう文面は全くなかった。その中で今度の戦争に一貫して反対し続けたのが日本共産党であることを知らされた。現実にはコルホーズ（集団農場）等の実態を直接目にし、民主主義の利点が強く感じられ、いつしかこの思想に次第に洗脳されていった。

糧秣受領は主にタシケント市内に連れて行かれた。

品目ごと数量を確認し集計するのであるが、経理室で使用していた算盤を携帯していたので、楽に計算出来たのであるが、計算が早いので全く信用してくれない。担当の士官が更に再計算をするのだが時間がかかること甚だしい。その揚げ句、合っていると首をかしげるのである。検算に時間がかかり過ぎ、これでは折角の算盤も効果が発揮できなかった。

主食は黒パンと穀物の高粱、燕麦、白米、大豆等である。朝は雑炊、昼食は黒パンとスープ、夕食は黒パンまたは雑炊か御飯に一品料理である。時には白米で

普通の堅い御飯を炊き、塩漬けの鮭、鰯を塩抜きして、これをネタに、酸味が強いキャベツの漬物の汁を酢の代わりに利用し押しずしを作り給食にしたこともあった。

大豆も支給になったので岩塩から溶け出したニガリを集め豆腐も作り、豆腐汁あるいは奴豆腐にした。

野生のホウレン草が密生しているところがあり、この収穫に連れてゆかれた。「ヤボンスキー ビタミン ダバイ（日本人のビタミンを取りに行くから来い）」である。

この地方は高温で湿度が低いので乾燥野菜、乾燥果物が生産され、よく支給された。

あるときは大きな陸亀を捕りに出かけた。現地に天幕を張り、月夜に地中からはい出すのを待つのである。大量の亀を捕獲したのであるが、この料理が大変である。一たん大釜でゆでてから首や手足を先細の包丁を突き刺し取り出す。これをすき焼風の料理にした。体に似合わず鶏のような大きな卵が入っていて、これがまた結構美味である。残った亀の保管がこれま

た厄介で、倉庫に入れておくと、倉庫は土間のため土中に潜り込み逃げ出してしまふ。

昼食は主にパン食で、炊事係が作業現場と一緒に出かけ、現地にかまどを設置しスーブの炊き出しをする。材料と調味料を大きな平鍋に入れ、二人で両側の取っ手を握りぶら下げ運搬をする。冬には取っ手にロープをつなぎ、そり代わりに引っ張って行く。

乾草の運搬に郊外に出かけたときのことである、同志三人がトラックの荷台に乗せられ、一晚、泊まりがけで出かけたことがあった。もちろん宿泊はトラックの荷台の中である。下士官の引率のもと、運転手は体格の良い女性運転手であった。ソ連のトラックの運転手はほとんどが女性で、身長一七〇センチ以上ある大柄で骨格もがっちりとした立派な体格の持ち主ばかりである。使役の虜友は、自分と、大柄のIさんと、四十を過ぎた小柄でひょうきんなUさん、ふだんUさんをソーロクと呼んだ。ソーロクとは露語で四十である。

積み込みが終わり野原で夕食をとり、三人は乾草の中に潜りしばらく雑談をし眠りに入った。寝静まって

いた夜中に静止しているはずのトラックが静かに揺れている。

何だ出発したのだろうか、ソーロクのUさんが乾草の中から抜け出して運転台の中をのぞき込んだ。「オーイやってるよ」下士官と運転手は運転台でよろしく欲求を満たしているのである。全くだいいい気なものである。

旋盤工のWさんからステンレス板でスプーンの作り方の指導を受けた。先ず鑿(たがね)で型を切り取るのだが、ずぶの素人である小生の手に負える仕事でない。結局はWさんに型取りをしてもらい、根気よく磨き上げ、上等なスプーンに仕上げた。飯盒に使用するので若干長めのスプーンで、なかなか重宝したものだ。この作品はソ連から持ち帰った思い出の唯一の品である。カレーライスやシチューの時に妻が「お父さんのスプーン」といって食卓に置いてくれるのであるが、これを手にすると、しみじみと当時がしのばれる。

支給された靴は、ブツクで靴底は木である、全く歩

けたものでない。靴職人であったTさんが足の木型を作り、調達した牛皮とズックで糸に蠟ろうを塗り二本の針で縫い合わせてゆく、これが軽くまことに履き心地の良い靴に仕上がった。

鋳物工場の作業に行っている同志から、工場で使う綿糸、これが毛糸のような程よい太さで、これを調達し、ステンレスの編針で靴下、手袋、チョッキ、腹巻などを編み上げ身につけたので、冬の身支度は不自由しなかった。

小生、タシケントに抑留されて二年目にマラリア病にかかり発熱した。これが三、四日続くのである。発熱する前に悪寒が来る、このとき同志に辺りの仲間の毛布を借りてもらい何枚も掛けてもらう。間もなく発熱する。年に二度くらいこの症状が起こるのである。しかし帰国してからは一度も再発したことがない。これは風土病であったのであろうか。

昭和二十三年五月中旬、突然「トーキョーダモイ」の朗報が飛び込んできた、これこそ間違いなしと小躍りして喜んだ。間もなく有蓋車が準備され、これに積

み込まれナホトカに向け出発したのが昭和二十三年五月二十六日であった。二十日後の六月十五日にナホトカに到着しベタチョーク・ラーゲリに収容された。

またまただまされたトーキョーダモイである。帰国ではなく派遣の目的は築港整備の作業に従事することであった。ここで一年余りを過ごし、この地で初めて厳寒の冬を体験したのである。

小生は引き続き炊事要員であった。引揚船が当時一日一、二日おきくらいに入港し、一隻二千人くらいの定員で出港して行ったのであるが、奥地から次々と輸送されてきて虜友が乗船し出港していくのを、帰国はいつ頃になるのかわからない我々は、ただただ恨めしく見送った。

帰国が実現したのは昭和二十四年六月二十九日であった。我々が乗船する迎えの船が岸壁に近づくとき甲板から「皆さん長い間ご苦勞様でした」と書かれた垂れ幕が目に入った。

船は第一大拓丸で、待ちに待った帰国で感動し、整然とタラップを踏みしめ乗船した。途中、大しけに遭

い、ほとんどの仲間は船酔いでグロッキーとなり食事
も全くとれない状態であった。幸い自分はさほど船酔
いもひどくなく、仲間の世話をしてきた。このしけで
船は日本海の真ただ中で錨を下ろし停泊した。この
ため一日余り予定より遅れたのである。翌日、風波は
おさまり穏やかな晴天で、船酔いの連中も元氣を取り
戻した。

「オーイ日本が見えるぞ」この声に一齐に甲板に駆
け上がり、皆が叫んだ「日本だ」。国を出てから七有
余年ぶりに見る祖国日本である。美しい緑が目にしみ
た。

船が舞鶴港に着壁した。民主主義の思想に洗脳され
た我々は先頭に赤旗を掲げて上陸したのである。

栈橋には出迎えの舞鶴引揚援護局の職員が出迎えて
いた。特に目に入ったのが数人一列に並んだ白衣の看
護婦さん達であった。あちらで目にした女性はいずれ
も大柄の女性ばかりで、小柄な看護婦さん達は可愛ら
しくまた異様にさえ感じられた。

復員の手続きが進められ、退職金その他で貳千円也

が支給された。貳千円の大金に驚いた。長い間眼鏡に
不自由したので、早速この大金を持ち眼鏡を調達した
のだが、この高値にびっくり、ほとんど残金が無く
なってしまった。

七月四日付の復員となり、列車にて北海道に向け舞
鶴を出発した。青函連絡船で函館港に到着した。仲間
達と隊列を組み渡っていたとき、突然「ヨシアキ」と
呼ぶ声が耳に入った。苦小牧から父が迎えに来てくれ
ていた。思わず自分は列からはずれ、二人はその場で
手を握りしめ七年有余の再会に感激した。

函館に着くや、ひとまず父を列車に残し、日本共産
党函館支部に挨拶に出向き、仮入党の手続きをして列
車に戻り、再び父としみじみと語り合っているうちに
故郷の苦小牧に到着した。

苦小牧に落ち着いたが、まずは就職である。現役入
営のため退職した道庁に一応復員の挨拶に回った。

当時地元の苦小牧王子製紙会社は大変な好景気で、
公務員より王子製紙会社または関連の会社にあこが
れ、入社を期待してこれら会社の面接に赴いた。しか

し舞鶴に上陸の際、赤旗を掲げ、敵前上陸の気構えて帰って来た我々を、これらの企業は一樣にソ連からの引揚者を赤化と敬遠しているので就職活動には大きな壁であった。

函館に立ち寄り日本共産党に仮入党の挨拶に赴いた事もあり、苫小牧の日本共産党の党員から、早く正規の入党の手続きをするように催促された。また、「ソ連から復員した同志を囲む会」に招かれた。

身につけた思想問題や就職活動等々、身の振り方をじっくり考える必要があり、しばらく勇払郡追分町のある知人宅に身を寄せ、三カ月余り知人宅の家事を手伝いながら、充電期間を持ち、じっくりと今後の身の振り方、いかに対処すべきか模索した。

昭和二十四年の暮れ頃になり北海道庁から再就職の内定が届き、企業への就職は完全に断念し、地方公務員の途に進むことを決意した。

無事帰国できて、軍隊生活、抑留生活の悪夢から解放され、余生を送っている現在、ただただ強制抑留で犠牲になった友のご冥福を心からお祈りいたします。

【執筆者の紹介】

昭和十九年入隊後同じ中隊で隣の班におり、北海道出身者の関係で色々と御指導等を受け、現役時代及び戦後のシベリア、タシケント、ナホトカ等収容所で苦楽を共にして生き残った一人です。

帰国後も文通を交わしながら当時の思い出話を語り合える良き理解者です。

生年月日 大正十一年七月七日生

出生地 北海道旭川市九条

父 小三郎、母 ツルエ

の長男として生まれる。

弟一人、妹五人（現在四人）

昭和十一年三月 勇払郡追分尋常高等小学

校卒業

昭和十六年三月 北海道庁立岩見沢中学校

卒業

七月 北海道庁拓殖部地方林課

に勤務

昭和十七年

徴兵検査 第一種合格、

現役編入

昭和十八年三月

現役入営のため北海道庁

退職 当時任官前の現役

入営は退職であった

四月一日

現役兵として秋田連隊第

十七師団に入隊。本籍地

が秋田県であったので、

地元北海道の入隊を望

み、北海道苫小牧市に本

籍を移転したが、手続き

間に合わず、秋田への入

隊となった

四月十三日

渡満のため秋田市を出発

四月十九日

満州国黒河省山神府七二

一七部隊に編入

昭和十九年三月

白城子飛行場大隊に転

属。同隊においては経理

室勤務を命ぜられ糧秣担

昭和二十年八月中旬

当となる
奉天に移動

八月十五日

奉天において連合軍に無

条件降伏の玉音を聞く

九月十三日

奉天郊外で武装解除、ソ

連軍の捕虜となる

九月中旬

黒河省黒河に輸送され約

一カ月収容される

十月二十日

黒河の対岸ソ連領のブラ

ゴエシチェンスクに渡る

十一月十六日

ソビエト連邦ウズベック

共和国タシケント市、タ

シケント収容所に収容さ

れる

昭和二十三年六月十五日

ナホトカのベタチョーク

収容所に収容される

昭和二十四年六月二十九日

第一大拓丸でナホトカ出

航

七月四日

舞鶴で復員

昭和二十五年一月

北海道庁に再就職、北海道苫小牧林務署に勤務、

その後旭川、滝川、函館、当別各林務署に勤務、北海道林務部を最後に昭和五十六年三月勅奨

退職

現在の動向

札幌市厚別区の現住所において、妻と詩吟及び社交ダンスの共通の趣味を持ち、関係団体において会員等の指導に当たっている。

(北海道 北野 實)

シベリア抑留記

岩手県 山本 喜代四

一、民主教育始まる

昭和二十二(一九四七)年二月、大隊長も変わり、

各小隊の隊長が民主委員になり、委員長には講習を受け転属してきた原田という人が就任した。それから朝の点呼のときの訓示は大隊長ではなく民主委員長が行うようになった。原田は某大学を卒業しているとかで演説が上手だった。

演説は朝の点呼のとき、五分から十分くらい毎日行われた。第一の演説は、「諸君、青年行動隊を見ろ、何か感ずることはないか。階級章を付けてないだろう。もう軍隊はないのだ。我々は平等なのだ」と、こういう具合だった。翌日にはもう階級章を付けているものは誰一人いなかった。

六月頃になって、食堂の一隅に図書室が設置され、マルクス、レーニン、スターリン等の書籍が自由に見ることが出来るようになった。また、劇団も出来て演芸会も行われるようになり、プロの音楽家もいたように、マンドリンの上手な人もいた。

各ラゲルには畳一枚から三枚分くらいの大きさの壁新聞が張り出された。プロの画家や絵かきがいいたらしく、かなり上手な絵が描かれていた。スローガン